

ペスタロッチーの道德教育論

——現代に生きる教育の基本原理——

影 山 昇

目 次

はじめに

I ペスタロッチー在世当時のスイスの
情勢

II ルソーの夢による覚醒

III 著述活動の展開

IV シュタンツ孤児院の教育経営

1 シュタンツ孤児院の開設

2 孤児院の教育の推移

3 孤児院での道德教育

むすび

はじめに

ペスタロッチー (Johann Heinrich Pestalozzi, 1746~1827) の名前を知ったのは昭和31年 (1956) 4月、静岡大学教育学部在学中に受講した「初等教育原理」(担当・加藤三郎教授)の最初の時間であった。

その後2年経た昭和33年4月開講の「教育学演習」(担当は同じく加藤三郎教授)に出席した折には、洋書講読のテキストとして、ペスタロッチーの『シュタンツだより』(Brief an einen Freund über Seinen Aufenthalt in Stanz, 1799)、正確には「シュタンツでの滞在について友人に宛てた書簡」(以下『シュタンツだより』と略す)が取り上げられ、乏しい語学力のために悪戦苦闘しながら、ペスタロッチーの実践的な教育思想の数々を学び、それがそのまま著者の卒業論文「ペスタロッチー研究——人間形成と国民教育——」(未刊)につながっていった。

ところで現今のわが国の教育では、知識・偏差値の教育が戦後のこれまでの日本の発展に一定の貢献を果たしてきたものの、残念なことに独

立した人間として当然備えていなければならない規範なり心情の教育に欠ける傾向が認められる現況を生み出してしまった。されば、知識や技術を身につけさせる教育と人間として本来的に備えるべき人格の育成や心情の陶冶のための教育とがつねに一体的に実践されることが現今の教育で一番要請されているのである。

その点で改めて以下で、かつて悪戦苦闘しながら学んだペスタロッチーの『シュタンツだより』で展開されている道德教育論を考察することはきわめて示唆的かつ有益である。

そこで本稿では、『シュタンツだより』の考察を通じてペスタロッチーの道德教育論が、実はまさに現代に生きる教育の基本原理そのものであることを論証する。

I ペスタロッチー在世当時のスイスの情勢

ペスタロッチー在世当時のスイスでは、当時のヨーロッパの大半がそうであったように、激動の流れのなかにあった。

概して旧来のものをあくまでも保持しようとする動きが強いなかで、国全体を揺り動かす新しい風が隣国から吹き寄せており、古さと新しさとは混在したかたちで新しいものを創り出すための葛藤の真只中にあった。

18世紀中葉におけるスイス諸県の農村の多くは都市との格段の差の貧しさに泣き、各農家の家族の実情は、狭隘な持ち分地単位で農業が営まれ、牧場の使用については村落共同体の同意が不可欠であった。

他方、都市といえば、少数の貴族的な特権階級市民に独占的に支配されており、他の多くの一般市民はその市政に関わる何らの権利ももたなかった。必然的に社会的な道德も大いに頹廃し、醜惡な利己的風潮がスイス全体に横溢する傾向が顕著にみられた。

ペスタロッチー在世当時のスイスには、13の^{カントン}県、18の共同領、9連合地並びに3保護地等、30有余の自治体が並立し、それぞれ独自の憲法をもつ各自治体が特異な政治や行政を展開していた¹⁾。([図1] 2)参照)

その特色は、一般人民を抑圧し、移動や転居の自由も極度に制限され、産業の自由な展開も認められず、都市自体も農村に対して専制的な態度で臨み、農民の生活は極度に貧窮な状況に追い込まれていた。

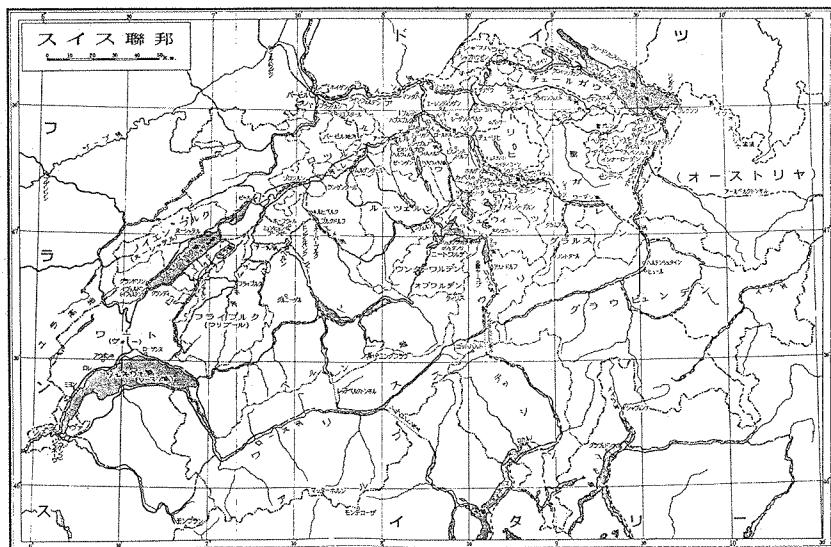


図1 ペスタロッチー在世当時のスイス連邦

ペスタロッチーが生まれたチューリッヒにおいても、その例外ではなかった。

すなわち、あらゆる名誉や利益を得るものはことごとくチューリッヒ市民が独占し、社会の主要ポストは行政・司法も含みすべてが村落の人民には無縁のものであった。

教育の面に眼を転ずると、例を高等諸学校の場合をみても、ただチューリッヒの市民の子弟にだけ入学を認めるのみで、村落では医師の子弟だけが例外として認められていただけであった。

その他、大きな利益をもたらす産業部門もまた一部の都市市民に独占され、村落民にはただごく一部の手工業のみが開放されているだけであった³⁾。

かくしてペスタロッチーは、こうした旧き権威がわがもの顔にはびこり、大半の人民が特権市民に隷属している社会的な状況の中で生い立ったのである。

そこで、以下では少年期のペスタロッチーの社会観の一端を、長田新『ペスタロッチー教育学』中の記述によってみることにする。

少年ペスタロッチャーはチューリッヒから凡そ四哩のヘンク(Höngg)といふ村の牧師をしてゐる祖父アンドレーアス・ペスタロッチャーを訪れて毎年夏の幾週を暮らした。彼は此の地でチューリッヒの市民がこの近郊の農民を虐待してゐることや、彼等が町の商業を独占し且つ農民に対する市民権の譲与を拒んでゐることや、これに対して農民が極度の不平を懷いてゐることなどを具さに目撃した。祖父に従つて毎日教区の学校や病家や貧家を訪ね廻つた彼は幼いながらも民衆の生活の實際を知る事が出来た。社会の邪惡を除かうとする心は当時早くもペスタロッチャーの心の中に芽生えたとは多くの伝記学者の一致するところ⁴⁾。

こうしたさまざまな見聞を通じて、少年ペスタロッチャーは、農民や貧民がみな都市の人びと同様の権利をもてるような社会にしていかなければとの思いをつよく抱くようになっていくことになるのである。

II ルソーの夢による覚醒

J・H・ペスタロッチャーは、1746年1月12日、スイスのチューリッヒに生まれた。外科医兼眼科医の父ヨハン・パプティストが1751年、わずか33歳の若さで死亡したために、当時6歳のペスタロッチャーや2人の兄妹は母スザンナや女中バルバラとともに、その後は赤貧の生活を余儀なくされる。

だがスザンナやバルバラの献身とキリスト教への信仰による敬虔な宗教的な慈愛のなかで平安な幼年期を過ごす。

その後のペスタロッチャーは、ドイツ語学校で学び、さらに1754年から1761年までラテン語学校で研鑽を積む。ついで1763年までの2年間、人文大学(Collegium Humanitas)に学び、最後にカロリ大学(Collegium Carolinum)に進学し、1765年秋まで神学の研究を目指しつつ、言語学及び哲学を修めた。

その間に、ボードマー教授を中心とする愛国的な青年運動に身を投ずる。

この青年運動は簡素、道徳的で厳格な規律、さらに祖国愛という3項の伝統的なスイス精神の育成を重視し、青年ペスタロッチャーはこれに強

い共感を覚えた。

ペスタロッチャーははじめ、牧師として生涯を神に捧げようとした。牧師職こそ国民の道徳的・知的向上の促進に最適の職業で、彼の目指した社会改革の意図に合致するものと考えていたからである⁵⁾。

しかしながら、途中でその考えを断念する。その動機は、主としてルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712~1778) の影響によるものであった。

その頃のことを回想し、ペスタロッチャーは晩年の著書『白鳥の歌』(“Schwanengesang”, 1826) 中で次のように述べている。

『エミール』が出るや否や、わたしのひどく非現実的な空想精神は、この同じようにひどく非現実的な空想の書からひどく感動を受けた。わたしはわたしの母の居間の隅ならびにわたしが通学した教室で受けた教育と、ルソーが彼のエミールの教育として要求し強要した教育とを較べてみた。世界中のあらゆる階級の家庭教育も、わたしにはまったく畸型であるかのように思え、そのあわれむべき実際に対する一般的な救済手段は、ルソーの高き理念に求められることもでき、また求めねばならないと考えた。このルソーによって新たに鼓吹された理想主義に基づく自由思想もまた、国民にいっそう大きい浄徳にみちた活動の範囲を与えようとするわたしの空想的な努力を高めた。わたしの生れた町ではこの点で何かなされねばならないだろうか、また何が可能であろうかということについての子供らしい考えから、わたしは以前に心をひかれ決心していた牧師の職を捨て去るようになり、法律を研究することによって、わたしの生れた町のみならずわたしの祖国の市民の状態の上にくらか実際の影響をおよぼすような機会と手段とが早晩得られるような職業を見出すことができたらなあ、という考えを起すようになった⁶⁾。

こうしてペスタロッチャーは、法律で身をたてようとするが、友人ブルンチュリーの忠告で、法律の道も絶つ。

その後、単純静寂な農業生活につよく心を寄せるところとなり、ビルフェルトの広い平野にあるビル村とブラウネックベルクの間にあるレッテンに土地を入手し、ノイホーフと名づけて農業生活を始める⁷⁾。

1769年の秋、7歳年長のアンナ・シュルテスと結婚、辛酸を共にする

ことになる⁸⁾。

やがて長男ヤコブを得、その子どもの教育に細大の注意を払い、観察・実験及び生活に基づく実地教育により、種々の経験と多くの教育的知見とを獲得した。

だが農業経営そのものは失敗に帰してしまいが、やがてノイホーフで貧民学校の設立を計画する。

ペスタロッチーは『白鳥の歌』で回想する。

わたしは貧民学校設立の計画をひっさげて世に出た。これについての見解や主義は、経済的な点におけるわたしの実際的手腕に対する不信用にもかかわらず、各方面で喜ばれた。とりわけチューリッヒやベルンやバーゼルなどでは、多くの高貴な祖国の人々からひどく熱心に要望されたので、わたしはこの事業を始めると忽ち援助を得たが、その援助はわたしにこの目的を見誤らせ、わたしをまちがった方向に導くようなものだった。と同時にまた、この援助に基づいて、方々から多くの貧児がこの学校に入学を申込んできた。(中略)わたしは教授の下段階の出発点の基礎を確実にしないで、上層の段階へと急ぐことをあれほど一般に非難し、これを現代教育の禍根と考え、わたしの教育案そのものによって全力を尽してこれを阻止しようとして欲しているのだと思っていたのに、そのわたしが工業の上層部門も、またそれを学習し習得する手段も全然知らないのに、その利益の大きいのに眩惑されて、わたしの学校の子供たちに糸を紡ぐことや布を織ることを教えるにあたっている右に述べたように、わたしの教育の意見では全然排斥し非難し、あらゆる階級における家庭の幸福を危険にするものだと考えていたその同じ誤まりを犯すにいたった⁹⁾。

この回想でも指摘されていることだが、ノイホーフでの貧民学校設立の動機の背景に農業経営の挫折があり、経済面での救済にウェイトが置かれていたことがうかがえる。

さらに付け加えるに、産業諸活動に従事する子どもに必要な作業を教えて事業者に人材として供給する役割が貧民学校(1774~1780)に期待されていたこと。したがって、この頃のペスタロッチーの内面には純粹

で人間愛に燃えてはいたものの、この時点ではまだ人間の内面、つまり精神力を陶冶するという一般陶冶の考えの域までには到達してはいなかったのではなからうか¹⁰⁾。

最終的にはノイホーフの貧民学校の経営にペスタロッチーは失敗する。

Ⅲ 著述活動の展開

貧民学校の経営から離れたペスタロッチーの1780年以降の生活は、シュタットの孤児院を開くまでの20年間の前半約10年間は、著述活動に終始する。

その間の著書を列举してみよう。

『隠者の夕暮』(“Die Abendstunde eines Einsiedlers”, 1980)・『リーンハルトとゲルトルート』(“Lienhard und Gertrud, Ein Buch für Volk”, 1981)・『クリストフとエルゼ』(“Christoph und Else”, 1882)・『リーンハルトとゲルトルート』の第2巻(1883)、同じく第3巻(1785)・第4巻(1787)を相次ぎ発表する。

さらにその間に、ペスタロッチーは『立法と嬰兒殺し』(“Über Gesetzgebung und Kindermord”, 1783) 全1巻も著わしている¹¹⁾。

これら一連の著述中では『隠者の夕暮』と『リーンハルトとゲルトルート』の2著が特に代表的なもので、前著は彼の教育思想が、この書に始まり、この書に最終的にはかえるといわれるほど意義深い書である。

玉座の上にあっても木の葉の屋根の蔭に住まっても同じ人間、その本質からみた人間、一体彼は何であるか¹²⁾。

これが本書の冒頭の一句で、人間の本質をまず人間の本質を知ることの必要から自らの説を書き起こし、最後には人間を心の底から充足させることを人類救済の第1条件と説いている。

本来、人類は純粋な浄福力を完成させることが普遍的な要求であるとされている。つまりすべての人間の内面の奥底に存在する力を純粋なる英知にまで高めていくことが教育の目指すところである。

これを教育場面に適用していえば、教育を担う者は、人間性の本質、

子どもの発達其自然の法則を究めねば教育実践は不可能であるというのである。

さらに人間の本性の中で呼吸している神は浄福の源泉であり、神に対する信仰こそ、まさに人間の本性の最高潮の人間の感情の情調であり、生命の安息の源泉であるという。

かくして人間を人間たらしめることが一般的理念の陶冶となる。

さらに長田新の考察に従えば、『隠者の夕暮』の基調は「生活圏」陶冶の思想によっていどれられると。

何故ならば、人間の教育は実に被教育者の個々の境遇に結びつくことではじめて成功するからである。さらにいえば、われわれ人間の魂は身近な対象（生活そのもの）によってのみ形づくられる。この観点から、ペスタロッチーは郷土科の原理を発展させていく。

あわせ社会改革と貧民の救済を生涯の事業とした彼は、民衆の真の救済を願い、上流階級ないし支配者階級には政治道德の確立を説き続けていくのである¹³⁾。

続く後者の『リーンハルトとゲルトルート』（教育小説）の大略は次のようなものである。

ボンナル村に貧しい石工リーンハルトの一家がある。その妻はゲルトルート夫人で7人の子供の母である。村の税吏フンメルは悪人で居酒屋を営み、村で働く人々を自分の店に誘導し、酒を飲ませ、金銭を浪費させる。

リーンハルトは正直者だが気が弱く、フンメルからは嚇しつけられ、酒に溺れていく。一方、ゲルトルート夫人は敬虔な信仰の厚い誠実な人物で、夫をいたわり、励まし、子どもの躾けもきちんとし、隣人にも親切で、辛抱よく、正しい道を歩むことに懸命である。

あくまでも夫を信じ、敬い、愛し、育児に励み、何としても夫の居酒屋出入りを止めさせたいと思いながらも、夫の方は立ち直りをみせない状況が続く。

やがて決意し、神への祈りの下で妻とともに、フンメルを城主アルネルに告発する。結果は、城主がリーンハルトには村の教会建築の仕事を依頼し、他方フンメルを処罰し、村全体も平安を取り戻し、

ゲルトルート¹⁴の家庭も幸福な日々を送るようになる。夫婦は子供の教育に全力投球するが、その家庭教育の有様が地域全体に知られるようになり、その実際を目撃した城主アルネルは、大きな感銘を受ける。

そしてゲルトルートとリーन्हルトの家庭教育をそのまま学校で実践させれば教育の成果はさわめて大なるものと確信し、実行に移したのが、城主とともにゲルトルート一家の家庭教育を見学したアルネルの執事グリュールフィで、自らボンナル村の小学校長に就任し、教育によって地域の発展と、村民の福祉増進に努め、成果を挙げていく。

こうして、同種の学校教育がアルネルの仕えている侯爵領内全体に拡がり、孤児の教育はもちろんのこと、犯罪者の更生教育にまで及んでいくことになった¹⁴⁾。

この著書は第1巻が出版された時点ですでに読書界からは非常な歓迎を受け、雑誌の多くはこの書の讃辞を掲げている。

この書はまたペスタロッチャー著述中もっとも多く読まれ、かつ読者に深い感動を与えており、ここで描き出された人物像と、人間のさまざまな類型が単純化されて心理描写されながらも、個性をもった存在として読者に印象づける筆力も見落とすことのできない長所である。

あわせ、この書で展開されている教育思想は当然のことながら、前著『隠者の夕暮』と重なっている¹⁵⁾。

その後、ペスタロッチャーは約10年間、沈黙を余儀なくされる。

スイスの政治は著しく後退し、彼の革新的な見解はややもすれば不穏当なものとして受け止められてしまったことが大きな理由の一つである。

その間ペスタロッチャーは農耕に励み、生活を支えつつ、静かに思索を深化させていく。

長い10年に近い彼の沈黙時代に、ヨーロッパに一大革命が起った。1789年のフランス革命である。

その後、フランスは新憲法を制定し、ついで立法議会を開設して共和国を創建し、1793年にはルイ16世が断頭台に送られていく。

ペスタロッチャーはフランス革命自体には肯定的であったものの、革命の手段には批判的な立場をとっていた。

だが1792年にフランス議会在、ワシントン (George Washington, 1732～1799) や詩人シラー (Johann Christoph Friedrich von Schiller, 1759～1805), さらにはベンサム (Jeremy Bentham, 1748～1832) やペスタロッチーを、人類教化上、きわめて功勞のあつた人物であるとして“フランス市民”の称号授与を議会で議決した時に、ペスタロッチーはパリに招待されたが、祖国スイスの政治不安の状況を理由に、これを辞退している¹⁶⁾。

ところで約10年に近い沈黙を破り、ペスタロッチーは1797年に『人類の発達における自然の過程についての余の探究』(“Meine Nachforschungen über den Entwicklung des Menschengeschlechtes”)を刊行する。

この書は、ノイホーフで出版した最後の本で彼の道德教育論を理解するためには不可欠のものである。

それというのも、この書が、彼自身の日頃から抱いている思想の発展過程について、自らの自然感情を自らの市民感情及び道德についての考えと調和させようという基本的な考えに立脚し、時間をかけて発酵させた内容のものであるからである。

では彼が展開したこの『探究』中での根本問題は何であつたのか。

彼は「自然状態において」「社会状態において」さらに「道德状態において」それぞれ自分は何であるのかと自問自答するかたちで3種の異なる人間性、つまり動物人・社会人・道德人を發展的に考察をすすめている。

すなわち、動物人は未来への意識がなく、ただ感性的な快樂の中に埋没した生き方に終始することから、個人生活でみれば幼児期や人類史での原始時代に相当する。

感性を主体とする動物人は原始的生産活動を本領とし、生産活動から財産が生まれ、財産はそのままその多少から相互間の葛藤を惹起する。

ここから幸・不幸、運・不運は力があつて富める財産の所有者に味方して勝利者となり、敗者はやむなく勝利者に救いを求めなければならない。

こうして社会状態は始まっていき、いまや動物人はすすんで社会人へと変化していく。

社会人となると、人間はみな単なる自然状態の所産ではなくなり、各人それぞれの自由を制限し、規則・習慣・世論に自らを適応させていくことを余儀なくされていく。

教育によって社会的訓練を積む青年期はほぼこの社会人に該当する。

社会の状態においてはその体制を存続させるために法律や政治システムを必要とし、かつ、つねに人類の安寧や秩序を保持に努め、さらに科学技術の進歩や産業の発展を目指す宿命を人間は担う。

しかしながら人類の心情の向上は、科学技術や産業の進歩のようにはストレートに結び付くことはない。

では真の人類の心情の陶冶はどのようなところで期待できるのか。

それは道徳人において初めて実現できる。

それは自然や社会の所産でなく、人間各自の自らのうちにある“より善きもの”・“より高きもの”を絶えず求めていく所産（‘Werk meiner selbst’）である。

ペスタロッチーにあっては、道徳は善良な意志を貫きつつ、つねに正しいことを実践しようとするという、絶対的に個人の問題として把握される。そして社会的正義の実現にあっても、その延長線上で把握される。

それは余りにも微力であるが、社会や国家は道徳完成の途上にある段階に終始し、最終的には社会・国家を文化社会あるいは文化国家に発展させていくことを理想とした。

そこで彼は正しき立法（神そのもの）を社会生活の推進力と受け止め、立法に多くの期待をかけることになる¹⁷⁾。

以上のことを踏まえて、長田新は人間の本質と教育活動との関連を次のように集約しているのである。

要するにペスタロッチーは人間の本質を一、動物的、二、社会的、三、道徳的の三段階に分け、社会的と道徳的とにそれぞれ文明と文化とを対応させ、真の自律的精神的を道徳または文化において見たのである。教育活動は感性的存在より道徳的存在に進む自然の行路を意識的に助成する働きに外ならない。而も文化はこの教育に依って維持され発展される¹⁸⁾。

今日、多くの人びとは自然的状態における感覚的な夢ばかり追うことに終始している傾向が顕著で、それ以上のものを追求しようとする生き方が後退している。

また、他の多くの人びとにあっても、社会的な状態の保持に汲々として、それ以上の向上心に欠けている。

ペスタロッチャーが求めたのは道徳的状态における自己の確立と人間相互の連帯である。

要は、清浄無垢な自然人から、複雑かつ多様化した契約で維持存続する社会人を経て、内面の道徳的結合で満たされた道徳人に到ることが、人類の発達における自然の歩みであると、ペスタロッチャーは考察したのである。

IV シュタンツ孤児院の教育経営

1 シュタンツ孤児院の開設

1798年2月、ナポレオン勢力下でローマ共和国が設立され、この年4月にスイスも戦勝国フランスの威勢でヘルベチア共和国となった。

かくして従来の多数の自治体から成るスイス連邦は崩壊し、中央権力が統治する共和国の誕生で、スイス全体が政治面で平等となり、国民の自由平等も認められ、国家としてのスイスは福祉の基礎として国民の啓蒙と道徳による教化に力を入れていく。

ペスタロッチャーは新政府の教育施策に大いに共鳴し、国民の内面的自覚を促すべく、数冊の小冊子を発行する¹⁹⁾。

新政府のシュタッパー文部大臣はペスタロッチャーの主張に共感し、国策の機関週報の主事に彼を任用する。

当然のこととして、ペスタロッチャーは祖国の新建設は教育を基礎とすべきことをつよく主張し、文部当局にも積極的に提言していく。

その提言中には、貧民児童のための教育機関設立も含まれていた²⁰⁾。

たまたま1798年9月、フランス軍はウンテルバルテン地方の首都シュタンツを攻撃し、戦災による大きな被害が出た*。

* ウンテルバルテン地方は旧教徒が多く、旧体制下で幸福な生活を営んでいたため、新政府の施政方針につよく反対していたため、新政府はフランス軍の援助を依頼し、当地方に砲弾の雨が降ることとなってしまったのである。

判明した死者は男259人、女102人、児童25人の合計386人。焼失住宅

数は340戸、穀倉は228等々、孤児も169人も生まれる²¹⁾。

新政府はそこで孤児救済に乗り出し、シュタンツに孤児院設置を決定する。

その場所は尼僧院の一部を改造し、院長は文部大臣の意見でペスタロッチャーに決まる。

こうして1797年12月7日、彼はシュタンツへ赴任し、校舎修築の工事を監督し、翌年1月14日に50人の児童を受け入れた。それが同年春には80人に達する²²⁾。

ペスタロッチャーは『白鳥の歌』中でシュタンツでの生活を以下のように述懐する。

わたしのシュタンツへの招聘、ならびにわたしがそこで過ごした苦しい、しかしわたし自身にとっては幸福だった短い月日に対するわたしの記述については世人が知っているところである。民衆の教育の一番下の段階を単純化し、それによって民衆の教育の本質的な手段をその居間そのものに近づけようとするわたしの本質的な努力は、このシュタンツにおけるわたしを恍惚たらしめた生活のなかで、わたしの心のうちに現われてきた。わたしは子供たちの群の中に貧児の父として立った。わたしは本来の学問や技術の教養は少しも持っていなかった。わたしは彼らのために、ただ単にわたしの心にそなわる父としての力を持っていただけだった²³⁾。

ペスタロッチャーの回想は続く。

家庭生活の精神、このあらゆる真の人間陶冶、あらゆる真の教育の基礎は、わたしの愛、わたしの献身、わたしの犠牲を通じて、単純に、真に合自然的に、その浄福の力を発展していった。(中略) この生活はさらにまた、人民の教授手段を全般に単純化し、それによってこの手段を人民の居間の内部にもち込むようにしようとするわたしの努力の特別な見解の最初の出発点を、真に明確にしてくれた。

基礎陶冶の概念とか、またそれから必然的に生じてくる合自然的な教育・教授の方法の概念などは、わたしもわたしの周囲のものも、

まだこれを口にはしなかった。しかしそれらの力の本質的な結果が、事実上われわれの間に現われた。子供たちは子供たちを教えた。子供たちは子供たちから喜んで学び、進歩の早い子供は、進歩のおくれている子供に対して、自分たちが彼らよりもいっそう多く知り、いっそうりっぱに行うことができる事柄について、喜んで親切に教えてやった。(中略) 当時はまだ「相互教授」というようなことを唱える人はどこにもなかったが、しかしその相互教授の真の本源的な精神のもっとも微妙な要素が、わたしのもとで、わたしの子供たちの間で発達した²⁴⁾。

だがシュタンツ孤児院でのペスタロッチャーの「このひどく祝福された月日も、矢のごとくすぎ去ってしま」う²⁵⁾。やがて戦局の変化は彼自らが目的の特質によく見合った進路を提供してくれたものと確信したシュタンツの地であったにもかかわらず、ペスタロッチャーはついに追放される運命に見舞われてしまうのである。

2 孤児院の教育の推移

シュタンツ孤児院開設当初の子供たちは、5歳から15歳までのものがおり、その大半が孤児・貧児で病身、心身薄弱、無知、怠惰、冷酷、乱暴、猜疑心といった短所ばかりを備えた子供ばかりであったという²⁶⁾。

ペスタロッチャーは、家事の世話をする女性一人のほかは何人もの助けをも受けず、自らが父となり、母となり、友となりと、あらゆる仕事を自分のみでやり遂げていく。

彼は自ら理想とするところを自らの力で具体化すべく努力し、人間教化の必要性と可能性を追求し、実践によってその理想実現に力をそそいだ。

だがこうした努力を積み重ねていたペスタロッチャーに対する世間の眼は意外に冷酷なものであったものの、新政府当局の方は、彼の仕事に理解を示していた。

1799年6月、シュタンツへのフランス軍再進攻と傷病兵が続出したところから、人間教化、新教育の発祥地ともいえるこの孤児院の一部を傷病兵病院に充当するというこで、ペスタロッチャーの極力の反対も空しく、孤児院は実質的縮小を迫ることとなる。

かくして同年6月8日、孤児院内にはわずか22人を残し、他の60人ほどは各地に分けられ、せっかくの彼の6カ月にわたるこれまでの苦心の経営も十分な稔りをみるまでには到らなかった²⁷⁾。

さらに決定的となったことは、さすがのペスタロッチャーも甚しく健康を害し、療養を余儀なくされたことである。

ここにおいて、シュタンツ孤児院はその後、同市参与のマットを監督として種々の改革が加えられ、30人前後の児童を収容するまでになるものの、ペスタロッチャー経営当時の活況にまでは達し得ず、まもなく閉鎖されてしまった²⁸⁾。

ところで孤児院長を解かれたペスタロッチャーのその後をみると、心身の過労から胸を病み、悲憤と失望で衰弱を増し、療養の必要を生じてシュタンツの地を去る。バルンを距る南10マイル余、ツンネル湖の西方にあるグルニーゲル温泉場にむかい、この地で保養し、健康回復に努める。そして、当地でシュタンツ孤児院における教育事業の報告と、それまでの思索と実践を統合した自らの一般児童教育の要点を記述するが、その成果が『シュタンツだより』となって実を結ぶことになるのである。

3 孤児院での道德教育

『シュタンツだより』中でペスタロッチャーは孤児院の教育の成果を確信をもって次のように述懐している。

最も憐れな最も見離された子供にも神の与え給う人間性の諸力をわたしは信じているので、この人間性が無教育と粗野とそして混沌との泥土の間にあっても、最も美しい素質と能力とを発展させるということを、ただに今までの経験がすでに久しくわたしに教えていただけてなく、わたしはわたしの子供の場合にも、無教育ではあるが、この生き生きとした本性の力がいたるところに発露するのをみた。わたしは事物の最も本質的な関係を人間に直観させ、健全な精神と天賦の知力とを発達させ、そしてなるほど人生のこのどん底に塵芥に埋もれているようにみえはするが、しかしこの環境の泥土のなかから浄化されると、明るい光で輝き出す諸力を刺激するために、生活そのものからくるもろもろの必要ないし要求が、どれほど

多く寄与するかということを知った。それをわたしは実行しようと思った。この泥土のなかからわたしはその諸力を取り出して、単純ではあるが純粋な家庭的の環境ないし関係のなかにそれを置き換えようと思った。わたしはこれだけが必要で、これさえできればその諸力は一段高い精神となり、一段高い活動力となってあらわれて、いつでもわれわれの精神を満足させ、われわれの心情をその最も内面的の深味において喜ばせることのできる一切をなしうるようになるということを確認した²⁹⁾。

では孤児院での生活の日々はどのようなものであったのだろうか。苦勞のなかにあっても充実した日々であったとペスタロッチャーは述べている。

わたしのなめた困苦はなるほどひどく苦しくかつ辛くはあったが、他の一面からみればわたしの目的の内実にとってはかえって好都合だった。というのはその困苦のためにわたしは子供にとってかけがえのないものにならざるをえなかった。わたしはほとんどただ一人朝から晩まで彼らのなかにおった。彼らの心身にためになるものはすべてわたしが与えた。(中略) わたしの手は彼らの手のなかにあつたし、わたしの眼は彼らの眼をみつめていた。

わたしは彼らとともに泣き、彼らとともに笑った。彼らは世界も忘れ、シュタンツも忘れて、わたしとともにおり、わたしは彼らとともににおった。彼らの食べ物、わたしの食べ物であり、彼らの飲み物はわたしの飲み物だった。わたしは何ものももたなかった。わたしはわたしの周囲に家庭ももたず、友もなく、召使もなく、ただ彼らだけをもっていた³⁰⁾。

孤児院の教育経営に自分のすべてを投げ出し、打ち込み、子供たちと生活を共にした状況が生き生きと回想されている。

さらに『シュタンツだより』全体を通じて読者につよい感銘を与える点は道徳教育に関する主張である。

ペスタロッチャーによれば、何よりもまず「人間教育に必要な全精神を包括もせず、家庭関係の全生活の上に建設もされないような学校教育

は、わたしのみたところでは、いたずらに人類を人為的に萎縮させるにすぎない³¹⁾」と断じ、さればこそシュタンツ孤児院では、「わたしの心がわたしの子供たちに愛着しているということ、彼らの幸福はわたしの幸福であるということ、彼らの喜びはわたしの喜びであるということ、こうしたことをわたしの子供たちに朝早くから夜遅くまで、いつでもわたしの顔の上に見、わたしの唇の上に感ずるはずだった³²⁾」と述べ、こうした子供たちへの愛情の基礎の上に立って教育に取り組んだことを指摘している。

こうした彼の努力の積み重ねが子供からの信頼と愛着とを獲得したわけだが、彼のもっとも排除したものは言語主義に堕した教育だった。

子供は自分の愛するものは何でも欲する。彼に名誉をもたらしめるものは何でも欲する。彼の大きな期待を鼓舞するものは何でも欲する。彼に力を与えるもの「ぼくにはそれができる」と子供に言わせるものは何でも欲する。しかしこうした意欲は言葉によって生み出されるのではなくて、あらゆる方面に子供が注意し、このあらゆる方面の注意によって彼の心に喚起される感情と力とによって生み出される。言葉は事柄そのものを与えるものではなくて、事柄らについての明瞭な理解力ないし意識を与えるだけだ³³⁾。

さらにベスタロッチーが教育上、特に留意したことは、「最初から儀式張らせて外面的の秩序を守る義務を教えこみ、規則や規定を説き聞かせて彼らの本心を教化する³⁴⁾」といった指導を拒み、以下のような指導方針を堅持していたことである。

わたしはぜひともまず第一に彼らの内的なものそのものと正しい道徳的な情調とを彼らの心のうちに目覚まし、鼓舞し、それによって外的なものに対して彼らを活潑ならしめ、注意深からしめ、愛情あらしめ、従順ならしめざるをえなかった。私はそうする外はなかった。わたしは「先ず内を^{きよ}めよ、然らば外もまた^{きよ}まるべし」というイエス・キリストの崇高な原理を信頼せざるをえなかった。しかもかつてそう信じたとき、この原理はわたしの事業において異論なく正しいものであることが証明された³⁵⁾。

こうして彼の思索と具体的な実践を通じて導き出した教育の方法原理は以下のようなものとなった。

汝の子供をまず寛大ならしめ、そして彼らの日々の要求を満足させることによって、愛と慈悲とを、彼らの感情と彼らの経験とそして彼らの行為との理解の及ぶところとなし、かくすることによってそれらの諸徳を彼らの内心に基礎づけかつ確実ならしめるようにせよ。然る後こうした善意を彼らの仲間の間に徹底し、かつ広く実行できるように熟達せしめよ。

最後にそして結局、善と悪との大事な特徴に触れて語るがよい。これらの特徴を日々の家庭的な出来事と境遇とに結びつけ、それらが完全にそれを基礎としているかどうか考えてみるがよい。それは汝の子供なりその周囲なりに起こることを子供に明確に理解させ、彼らの生活なり境遇なりに関する正しい道徳的の意見をその心に生ぜしめるためだ。しかし他人が二十もの言葉で説明することを、汝は二つの言葉で表わすために幾晩も徹夜して工夫しなければならないとしても、その徹夜を惜しむようなことがあってはならない。わたしは子供に口で説明してやることはめったになかった³⁶⁾。

ではペスタロッチーの6カ月に及ぶ孤児院での生活でどのような子供が生まれたのであろうか。

わたしはこの目的の達成にかなり成功した。人々は間もなく約七十人のひどく放縦な乞食の子が、兄弟姉妹の小家庭ですらめったにみられないような平和と愛と^{いんぎん}慇懃とそして誠実とをもっていっしょに暮らしているのをみた³⁷⁾。

入学してからの彼ら自身の確信は、とうとう入学当時懐いていた不人情を克服した。孤児院はますます発展して、一七九九年にはわたしは約八十人の子供をもつようになった。これらの子供の多くはよい素質をもっていたが、特に二三人の者は非凡な素質をもっていた。学習は彼らにとって概してまったく新しいことだったが、二三人の者は学習に成功するという希望を懐くや否や、その熱心さは不

屈だった。今までどんな書物も手にしたことがなく、殆ど主の祈りやアヴェ・マリアも暗記できなかった子供が、一二週間も経たないうちに、非常な興味をもって朝早くから夜遅くまで、ほとんどぶっ通しで学習するようになった。彼らは夜食の後でさえ、わたしが「子供たちよ、もう寝たいか、それとも勉強したいか」と尋ねると、特に最初のうちは勉強したいと答えることが常だった。(中略) 最初の熱心さがすべての子供の態度を支配して、学習はわたしの期待をはるかに越えるほどの効果を挙げた³⁸⁾。

かかる成果を挙げながらも、つねにより高さを求めるベスタロッチャーは決して自らの実践に対する厳しい反省も忘れてはいなかった。

わたしは名状し難い困難に出会った。教授を立派に組立てることはまだできなかった。

児童各自の粗野と全児童の無秩序とは、いくら信頼して事に当たっても、いくら熱心に事に当たっても、まだ取り去ることはできなかった。わたしは全孤児院そのものを秩序正しく経営していくために、さらに一個の高い基礎を求め、しかもそれをいわば創造しなければならなかった。のみならずこの基礎のできないうちは、孤児院の教授も学習も十分には組織できなかった。わたしもそんなことは欲しなかった。教授も経済も学習も先き走った計画からではなくて、むしろ子供とわたしとの関係から発展すべきだった。わたしはそこにもまた高尚な原理と陶冶力とを求めた。それは孤児院の高尚な精神と子供自身の調和的な注意と活動とから生まれてこなければならず、また彼らの生活と彼らの要求と彼らの社会的関係とから直接生まれてくるべきものだった³⁹⁾。

ここにおいてベスタロッチャーは、道德の基礎的陶冶の範囲は一般に3つの見地に立っていることを確信する。

すなわち、①「純真な感情によって道德的情緒を喚起すること」、②「正しくかつ善良なもののなかで克己と奮励とをさせて道德的訓練を行うこと」、最後に③「すでに子供が自分の生活と境遇とを通じて立つ正義関係と道德関係とを熟慮させ比較させることによって道德的見解を養

うこと」，以上①～③の3つの見地である⁴⁰⁾。

そこで以下では①～③の見地個々についての考察をすすめることにする。

まず①における「純真な感情によって道徳的情緒を喚起」させることの意味であるが，人間相互の信頼関係を培うことと，そのためには「ここを開くこと」が教育実践場面では教育者と被教育者あるいは被教育者相互に求められるというのである。

ではそこに到達するためには，どのようなことが必要なのか。

日々の子供たちの要求をまず充足させることだといひ，しかも充足された要求が彼らの道徳的情緒へと質的に転換し，彼らのここを開き，しかも彼らの愛と善行へと近づけ，それらを彼らの内面に着実に根づかせて信頼と愛情とを培っていくことを現実のものにしていくことを，つよく期待している。

さらに付言すれば，その前提となるものとして母親としてのやさしく慈愛に満ちたまなざしと父親の力強い生き方との相互の働きかけのなかで，子供たちの諸々の要求を充足させていくことが不可欠だとしているのである。

続く②の見地では，人間社会ではつねに新しい課題に直面するのが子供たちの日々であるから，正しいことから善行における克己や絶えざる努力といった道徳的訓練が必要であるというのである。

この段階はまさに実践そのもので，ここでは，正義や善行を指向しての訓練→克己による訓練→道徳の実践力の形成といった3形式で道徳教育が展開される。

最後の③の見地の中心は，①と②の見地を重ねながらも，現実展開される道徳行為の領域内で，子供たちが相互の切磋琢磨を通じて，人間相互の理解を深め，相互の信頼関係を築き上げつつ，将来に夢と希望を抱いて，日々力強く歩み続けていける道徳実践力と反省とを忘れぬ子供たちを形成しようと努力している点にある⁴¹⁾。

以上，①～③の一連の考察を通じて指摘できることは，道徳教育の目的が日常の行為や行動かつ生活そのもののなかにある。そして道徳教育は，直覚的に子供たちの心情に訴え，善悪，正・不正，義務等の倫理総体の出発点となる基本概念が直観的に把握させることができるものであるとする立場をとり，あらゆる生活場面や機会をとらえて，行動と生活



図2 シュタンツ孤児院でのペスタロッcher(グロブ画)

(労働も含む)とを結合させ、その結果についてはつねに反省を求めて導いていくことが大切であるということで、あくまで知識本位の言語主義による道徳の指導は極力排除されていることがわかる。

さらにいえば、道徳的心情陶冶のためには、個々のこころの能力が維持され、強化・拡張されるように活動せしめ、訓練されなければならず、すべて神への信仰は信仰の最初の行為から、すべての愛は愛の最初の行動から、すべての正義は正義の最初の感情から生まれるものであるから、こころのこのような発達が促される場面はつねに日常の日々の生活場面においてであることを知らなければならない。さればこそペスタロッcherのいう「生活が陶冶する」(“Das Leben bildet.”)という一文が深い意味をもってくるのである。

では、ペスタロッcherの取り組んだシュタンツ孤児院での教育の実際はどんなであったのか。

ペスタロッcherはその点について以下のように回想している。

子供が多数でしかも不揃いであることが、わたしの仕事を容易にし

た。年上でもあればよくできもする兄や姉が、母の目の前で幼い弟や妹に自分にできることは何でもさっさとしてみせ、このようにして母の代理を務めると、喜んで得意がるものだが、それと同様にわたしの子供も自分のできることを他の子供に教えることを喜んだ。彼らの名誉心は目覚めてき、しかも自分で繰返すことを他の子供に真似て言わせることによって彼らは二重に学んだ。このようにしてわたしはたちまちわたしの子供のなかに助手や協力者まで見つけた。わたしは最初彼らに二三のひどくむずかしい言葉を記憶させて綴らせた。そして一人がその言葉を記憶できると、ただちに彼はまだできない二三人の子供を自分のところに呼んで教えた。このようにしてわたしは初めから助手をこしらえた。わたしは間もなく子供のなかに協力者を見つけたが、その協力者は未熟な者にはまだできないことを教える技倆があつて、いつも孤児院と行動をともにし、しかも雇い教師に比べると、孤児院の当面の用事にも信用できていっそう役に立ったが、彼らは何事につけても役に立った。わたし自身も彼らといっしょに学んだ⁴²⁾。〔図2〕⁴³⁾参照

むすび

近年のわが国では青少年による兇悪な犯罪が激発している。

特に平成9年(1997)には神戸市での連続児童殺傷事件や10年(1998)に入っても中高生による殺傷事件が相次ぎ、青少年犯罪は平成10年版『警察白書』によれば、兇悪化・集団化・いきなり型・低年齢化(兇悪事件を起こした少年の初非行年齢が殺人では14歳から16歳までが52%で、強盗でも60%弱)・覚醒剤などが特徴的で、戦後第4のピークと指摘されかねない状況となっている⁴⁴⁾。

「刑法犯少年のうち主要刑法犯で補導された者の人員および人口比の推移」(「図3」)をみると、①③⑤がそれぞれピーク時を示し、②④⑥が減少時のボトムを示している。そしてボトム自体も、漸増傾向を示し、総体としても増加傾向がみられ、ここ数年に鋭角的な増大をみて第4のピークに向かいつつあるというのが現況であるといえよう⁴⁵⁾。

こうした現況を踏まえ、人を思いやる心情とか、人間の生命の大切さ、さらには自己抑制力のある人間教育をということで、学校教育で展

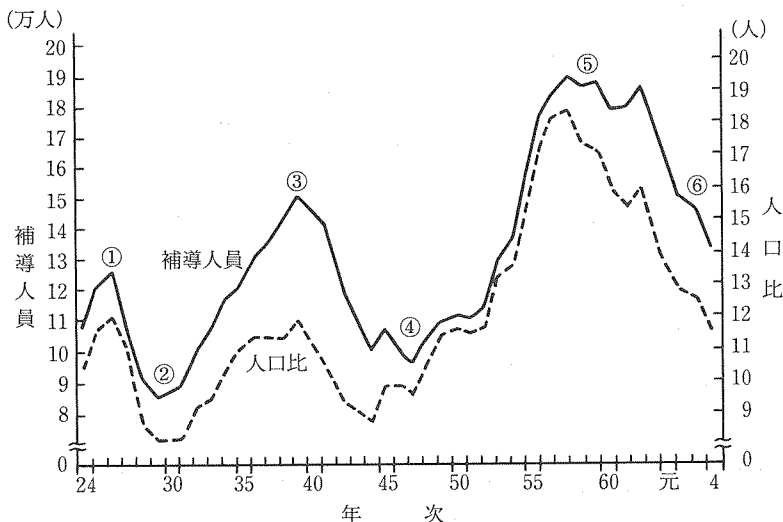


図3 刑法犯少年のうち主要刑法犯で補導された者の
人員および人口比の推移(昭和24年～平成4年)

出典：『警察白書』(平成5年版)

開されている現行の道徳教育の実践そのものの猛省を促しつつ、改めて「こころの教育」という視点から、その必要性がとよく説かれ、その具体的な方策が幅広く検討されているのが現在の教育界である。

こうした教育の課題に直面しているいま、「こころの教育」の定着に基づく豊かな人間性を備えた日本人の育成をより確かなものとしていく教育実践が求められている。

それだけに、ペスタロッチーがシュタンツ孤児院での教育愛に裏打ちされた教育体験から生み出されたキリスト教信仰と家庭教育を基盤とした、内面の生命力を重視した直観主義、生活主義、相互教育に基づく実践主義、全機会主義を一体化した道徳教育に対する彼の見解は、現在問われている「こころの教育」の具体的な方策を検討するうえできわめて有益であり、彼の見解を地域社会に内在する教育力の回復と学校及び家庭での力動的な教育諸活動と結び付け、青少年非行を抑止し21世紀に生きる人間性豊かで創造性に溢れ、主体的で気力の充実した日本の子供を育てていくことがまさにわが国における当面する緊急の教育課題であるということができよう。

注

- 1) 小西重直『新日本建設とペスタロッチャー（新教育叢書1）』（西荻書店・昭和24年〈5版〉），72-73ページ。長田新『ペスタロッチャー伝・上巻』（岩波書店・昭和26年），15ページ。今来陸郎編『世界各国史Ⅶ・中欧史』（山川出版社・昭和32年）参照。
 - 2) 長田新，前掲書・上巻，「口絵」。
 - 3)～4) 長田新『ペスタロッチャー教育学』（岩波書店・昭和9年），110-112ページ。
 - 5) 長田新「ペスタロッチャー」（稲富栄次郎監修『教育人名辞典』理想社・昭和37年），568-569ページ。玖村敏雄『ペスタロッチャーの生涯』（玉川大学出版部・昭和23年）参照。
 - 6) ペスタロッチャー・佐藤正夫訳「白鳥の歌」（長田新編『ペスタロッチャー全集・第12巻』昭和49年〈再版〉・以下『全集』と略す），197-198ページ。
- なお，ルソーの『エミール』（“Émile on de l'education”，1762）は，自らの教育論を集約的に叙述したもので，エミールと名付けた男の子の出生から結婚に到るまでが教育の発達段階に応じ，5編に分けて論述されている。執筆され始めたのは1756年頃からで，1760年に完成している。公刊後，すぐにキリスト教に反し，国の平安をもおびやかすものということで発売が禁止，没収されてしまっている。あわせバリ高等法院でも焚書・執筆者逮捕の判決が出，ルソーはスイスに逃亡，さらにプロイセンにも入るが，後には官憲の黙認の下にフランスに立ち戻っている。具体的内容については，今野一夫訳『エミール』上・中・下3巻（岩波文庫・1962・1963・1964）参照。
- 7) 小西重直，前掲書，23-25・30ページ。
 - 8) 妻アンナについては，ザイファルト・市村秀志訳『ペスタロッチャーに相応しき妻・アンナ』（イデア書院・昭和2年）にくわしい。
 - 9) ペスタロッチャー「白鳥の歌」（『全集・第12巻』），206-207ページ。
 - 10) 長田新，前掲書・上巻，101-104ページ参照。
 - 11) 「ペスタロッチャー著作年表」（玖村敏雄・前掲書）参照。
 - 12) ペスタロッチャー「隠者の夕暮」（『全集・第1巻』），369ページ。
 - 13) 長田新，前掲書・上巻，109-119ページ参照。
 - 14) ペスタロッチャー・松田義哲訳『リーナハルトとゲルトルート・第1部～第4部』（『全集・第2巻』及び『全集・第3巻』所収）参照。
 - 15) 小西重直，前掲書，49ページ。長田新，前掲書・上巻，119-120ページ。

ジ参照。

16) 玖村敏雄, 前掲書, 96-97ページ。

17)~18) 長田新, 前掲書・上巻, 156-161ページ。

なお, 「探究」は『全集・第6巻』(虎竹正之訳)に収められている。

19) 小西重直, 前掲書, 72ページ。

20) 長田新, 前掲書・上巻, 175ページ。

21) 玖村敏雄, 前掲書, 114-115ページ。

22) 長田新, 前掲書・上巻, 193ページ。

23)~25) ペスタロッチャー・佐藤正夫訳「白鳥の歌」(『全集・第12巻』),
224-225ページ。

26) 長田新『ペスタロッチャー伝・上巻』には, シュタンツ孤児院に収容された男児29人, 女児16人の合計45人の姓名・年齢・住所・両親のこと・健康状態・素質・教育・境遇などが一覧された資料が提示されている。(同書・190-193ページ)

その内訳をみると, まず男児は12人は母のみ生存し, 7人は父のみ生存し, 両親とも生存は10人。

健康状態は, 24人が健康体だが, 腫れものや疥癬に悩まされているものもいれば, 多くの毒虫の巣のボロを着ている状態で, 骨と皮ばかりの栄養失調の状態のものが多い。病気の者は1人, 虚弱児2人, 猫背で病身のものが1人となっている。

素質面では, 行儀のよい子は5, 6人で, 性質も善良だが, 他の多くの者はほとんど躰ができておらず, 粗暴で, 怠惰かつ臆病で何かを恐れている感じの子供たちばかり。

教育程度は, 多くはABCも理解できず, 糸を紡ぐこともほとんどできない。境遇は, 赤貧の経済状態のものばかりで, 食を求めて彷徨していた者も数人いる。

女児については, 男児と比べて, 素質や教育の面でやや良好なるも, 大体において男児と大差なく, 境遇は全員が赤貧者。父を失った者は8人, 母のいぬ者が2人, 両親をもつ者は6人であったこと等がわかる。

27) シュタンツ孤児院解散の経緯については, 長田新・前掲書・上巻・214-217ページに詳しい。

28) 長田新, 前掲書・上巻, 218-220ページ参照。

29) ペスタロッチャー・長田新訳「シュタンツだより」(『全集・第7巻』), 10ページ。

30) ペスタロッチャー・長田新訳「シュタンツだより」(『全集・第7巻』),

14-15ページ。

31)～33) ベスタロッチャー・長田新訳「シュタンツだより」(『全集・第7巻』), 12-13ページ。

34)～37) ベスタロッチャー・長田新訳「シュタンツだより」(『全集・第7巻』), 20-21ページ。

なお、ここにベスタロッチャーが引用した「先づ内を浄めよ、然らば外もまた浄まるべし」という聖句は、新約聖書マタイ伝・23章26節「まず、杯の内側をきよめるがよい。そうすれば、外側もきよくなるであろう」である。類句としては、同書・マタイ伝・6章25節及びルカ伝・12章23節「生命は糧よりもすぐれ、身体は衣服よりもすぐれている」がある。

要は、聖句から導き出された衣服よりも身体を、身体より内的生命を重視する教育の基本原則が、ベスタロッチャーの目指したものであったのである。

38)～39) ベスタロッチャー・長田新訳「シュタンツだより」(『全集・第7巻』), 19-20ページ。

40)～41) ベスタロッチャー・長田新訳「シュタンツだより」(『全集・第7巻』), 28-36ページ参照。

なお、ヴォルフガンク・クラフスキー著・森川直訳『ベスタロッチャーのシュタンツだより』(東信堂・1997年)中で、3つの見地を以下の3段階として把握し、それぞれの意味を考察したところから、学ぶところが多々あった。

すなわち、「第一段階・多面的な配慮—ところを開くこと—信頼の覚醒」「第二段階・道徳的行為」「第三段階・反省」という考察である。(同書・107-132ページ)

42) ベスタロッチャー・長田新訳「シュタンツだより」(『全集・第7巻』), 40ページ。

43) 玖村敏雄、前掲書、「口絵」。

44) 「社説・少年法論議に一石を投じた白書(警察)」(『読売新聞』平成10年10月14日付)参照。

45) 長谷川一廣「講演＝学校の教育・家庭の教育」(成城学園教育研究所『成城教育・第101号』1998. 9. 25), 6-11ページ参照。